

---

# 昔の思い出

霧氷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昔の思い出

### 【Nコード】

N5330Z

### 【作者名】

霧氷

### 【あらすじ】

これは、羽瀬川小鷹と、ある少年の昔話。

## （前書き）

「あれ？ この二つって結構合うかも？」という考えのもと作って  
みました。

「うわあっ！」

羽瀬川小鷹は公園で、自分と同学年の少年達にからまれていた。原因は明白、自分の髪の毛の色だろう。彼はイギリス人の母と日本人の父を持つハーフなのだが、父親に似てしまったせい、髪の色は金髪ではなく、黄土色がかかったくすんだ金色になってしまっている。そのせいで、昔から何かとからまれる事が多かった。そして、今現在進行形で複数の少年達に襲われている。

（くそっ……。こんなときあいつがいてくれたら……。）

あいつとなら、誰と戦っても負ける気がしない。しかし、あいつはもういない。少年の拳が小鷹を襲おうとしたそのとき、

バキッ！

突然そんな音が鳴り響き、少年の体が吹き飛ぶ。小鷹が横を見ると、そこには自分と同じ年の少年が拳を構えて立っていた。

「やめろお前ら！ 大勢で襲い掛かって恥ずかしくねーのか！！ 男ならタイマンだタイマン！」

少年が叫ぶと、周りの少年達が怒りを見せ始める。

「何だコイツ！」

「やっちまえ！」

少年達が少年に襲い掛かる。それを見ていた小鷹は、少年を助けるために自ら少年達の群れに飛び込んでいく。

そして、小鷹と少年は勝った。少年は小鷹に向き直り、ニツと笑った。

「大丈夫か？」

小鷹は戸惑いながらも、少年に返事を返す。

「ああ、ありがとな。名前、何て言うんだ？」

小鷹が尋ねると、少年は胸を拳で二回叩き、同じ手の人差し指をビツ！！と小鷹に向けた。

「俺の名前は――――だ！俺の夢は、今いる学校の連中全員と友達になる事だ！」

一瞬小鷹はポカンとするが、やがてぷつと吹き出した。

「ハハ！面白いなお前！」

「ん？そうか？ははははは！」

二人はお互いに笑いあった。

それから二人は遊び始めた。鬼ごっこに、かくれんぼに、絵描き。それは、親友と別れた小鷹にとって、とても楽しい時間だった。

そんなある日、二人がコーラを飲んでいると、小鷹が話し始めた。  
「なあ――――。前に、俺の友達のお母さんがそいつに言  
ってたらしいんだ。一年生になったら、友達百人なんてできなくて  
もいいから、百人分大切に出来るような本当の友達を作りなさいつ  
て。たった一人だけでもお互いの事を誰よりも大切に思える本当の  
友達がいれば、きっと人生は輝かしいものになるだろうって」

「へえ、良い言葉だな」

「ああ、だから、俺もお前の事を、その友達と同じくらい大切にす  
るよ」

小鷹がそう言うと、少年は笑顔を小鷹に向けた。

「ありがとな！じゃあ、俺もお前や他のやつらも全員百人分大切

にしてやる！」

その言葉に、小鷹は苦笑して、

「だけど、そんなにたくさん友達なんて、覚え切れないんじゃないか？」

だが小鷹の言葉に少年は首を振って、

「いいや！ 俺は絶対に誰の事も忘れない！ そいつの事を覚えていれば、また絶対にそいつを会える！ だから、俺はたとえ友達が百人、いや千人出来ても、そいつらの事は忘れない！ そいつが俺の事を忘れていても、俺は絶対に忘れない！ そいつらの事を百人分、いや何百人分も大切にしてやる！ もちろんお前もだ、小鷹！」

少年に言い切られ、小鷹は顔が熱くなった。そこまで言い切られると、かなり照れ臭い。それを誤魔化すため、小鷹はコーラを一気に飲み干した。

そんな彼らに、別れるときはやってきた。小鷹が転校することになったのだ。重い気持ちを抱えながら、いつもの公園に行くと、そこには少年が暗い顔をして立っていた。

「・・・どうしたんだ？ - - - - -。何かあったのか？」

少年は小鷹の方を見ると、少しためらいがちに声を出した。

「・・・実は俺、転校するんだ」

「えっ・・・。お前も？」

「小鷹もか？」

「ああ・・・」

二人の間に重い雰囲気が出る。しかし、やがて小鷹が言った。  
「・・・なあ……。また、会えるよな？」

すると、たちまち少年は笑顔を取り戻し、

「ああ！ 当たり前だ！ 俺達は友達だからな！ 俺達がお互いの事を忘れない限り、俺達はいつまでも友達だし、また会える！」

それを聞き小鷹も笑顔を取り戻す。何故か、この少年の言葉は人を元気にさせる。そして、少年と小鷹は一步お互いに近づくと、お互いの拳を数回打ち合わせる。

それは、前に少年が教えてくれた動作。

二人が友達である事を示す、『友情の証』。

「じゃあ、また会おうな！」

少年が笑顔で片手を上げ、小鷹もそれに答える。

「ああ、またな。」

弦太郎

「んっ・・・」

聖クロニカ学園二年生、羽瀬川小鷹は目を覚ました。

「・・・あれ、俺なんの夢見てたんだ？」

かすかに覚えているのは、自分が小学生の時に、誰かと友達で、一緒に遊んでいた事だけだ。しかし、誰かと遊んでいたかは分からない。ただ確かなのは、前に思い出した黒髪の少年とはまた違う少

年だったという事だけだ。

「・・・なんて名前だったっけ」

小鷹は眉をひそめながら呟くが、やがて朝飯を作るために、台所へと向かった。

今日も、羽瀬川小鷹の友達作りの一日が始まる。



（後書き）

どうでしたか？ この二人なら、本当にこんな会話をしてそうだと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5330z/>

---

昔の思い出

2011年12月17日23時47分発行